

黒川文庫蔵『こうろき物語』解題・翻刻

渡邊 亜紀

室町から近世にかけて、動植物があたかも人間のように思考し所作をするという設定の「異類物」と呼ばれる物語草子類が多く制作されている。さらにその中には動植物が歌合を催すという「^{注1}擬歌合物」と称される一群が存在する。黒川文庫本『こうろき物語』（通称「^{注2}こうろき草子」）はそれに属し、『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』に書名が記され、室町物語に分類されている。本書は『室町時代物語大成』第五巻に収載される、内閣文庫本の解説中に、語句の異同や歌の順序が異なる伝本として紹介があり、また部分的にその意味不明個所の判読の参考として使用されるものである。

この物語の伝本については、『増訂室町時代物語類現存本簡明目録』では内閣文庫本と本書、実践女子大本の二本が記載されるのみであるが、『国書総目録』によれば「^{注3}こうろき草子」の項に前記の二本が、「^{注4}こほろぎ物語（三十六歌仙こほろぎ物語）」の項に東大史料編纂所本、さらに中野幸一氏所蔵本が存在するので、四つの伝本の存在が確認できる。

室町物語とされている作品には、近世になってから流布した、或いは制作されたと思しき作品が多く存在するのは既に指摘されるところであるが、特に「^{注5}こうろき草子」を含めて、異類の「^{注6}擬歌合物」にはそのような作品が多く認めら

れるようである。例えば本書と影響関係の認められる『四生の歌合』のうちの『虫の歌合』（寛永頃古活字版他）や、『鳥歌合』（大阪青山短期大学蔵写本）、『魚虫歌合』（宝暦11年刊）などの作品があげられる。これらの作品には、動物達の歌合をじかに見聞きした隠者らしき人物の配置、という共通の設定がみられるという特徴がある。これらのうち『虫の歌合』を除いた諸作品にはいずれも伝本が少ないが、「こうろぎ草子」には筆写本が四本伝えられる。このような点から「こうろぎ草子」は、異類の「〔擬〕歌合物」の成立事情を考える上での好材料であるといえる。

次に伝本間の相違を簡略的に見てゆきたい。この物語の梗概は、「秋の夕暮れ方ある隠者が耳をすましてみると、下葉の陰から虫たちの物語りする声が聞こえ、始めにその中のこうろぎが身のあわれを述懐し、ひきがえるが歌合を促し、それに感じた虫たちが歌を詠み合い、最後にかえるといもりの歌争いで幕を閉じる」というものである。歌にはそれぞれの虫の名が読み込まれる。諸伝本における話は全く同一と言えるものであるが、伝本間において、少なからず語句の異同、および歌の順序が所々異なっている部分が見られる。歌数は三十五首或いは三十四首と一定していない。そこで伝本間の詠歌の順序と題詠の表記、および歌数を示すと以下になる。

黒川文庫本（34）		内閣文庫本（35）		中野本（35）		東大史料編纂所本（34）	
1 ころろぎ		1 ころろぎ		1 ころろぎ		1 こほろぎ	
2 機織虫		2 はたおり		2 はた織虫		2 はた織虫	
3 鈴虫		3 すゝむし		3 鈴虫		3 鈴むし	
4 蜻蛉 <small>とんぼ</small> （*1）		7 かけろふ		4 かげろふ		4 かげろふ	
5 玉虫		8 玉むし		5 玉むし		5 玉むし	

22 芋虫 <small>いもむし</small>	21 蟻 <small>あみ</small>	20 蛸 <small>たけ</small>	19 蜘蛛 <small>くも</small>	18 蟾螂 <small>かまきり</small>	17 茅蛸 <small>ひぐろし</small>	16 松虫 <small>まつむし</small>	15 轡虫 <small>くつは</small>	14 金龜虫 <small>こがねむし</small>	13 蠅 <small>は</small>	12 蚊 <small>か</small>	11 蛭 <small>は</small>	10 蚕 <small>きりくす</small>	9 蝶 <small>て</small>	8 蜂 <small>はち</small>	7 樵虫 <small>きこり</small>	6 蓑虫 <small>みのむし</small>
23 いもむし	21 あり	20 けら	19 くも	18 かまきり	17 日暮	14 松むし	16 くつはむし	13 小かねむし	15 はひ	6 蚊	5 はたる	4 きりくす	11 蝶	12 蜂	10 木こりむし	9 身のむし
22 いもむし	21 あり	20 けら	19 くも	17 かまきり	18 日ぐらし	15 松むし	16 くつわ虫	14 こがね虫	13 はい	12 蚊	11 はたる	10 きりくす	9 蝶	7 はち	8 木こり虫	6 みのむし
21 芋虫	19 蟻	18 けら	17 蜘蛛	16 かまきり	15 日ぐらし	なし	14 くつわ虫	13 こがね虫	12 はへ	なし	11 はたる	10 きりくす	9 てふ	7 はち	8 木こり虫	6 蓑虫

なし	なし	なし	なし
なし	なし	なし	なし
34 蟬 <small>せみ</small>	35 せみ	35 せみ	34 せみ
33 やすて	34 やすで	34 やすで	33 やすで虫
32 蛙 <small>かはづ</small>	33 かへる	33 かいる	32 かへる
31 守宮 <small>かみもり</small>	32 いもり	32 いもり	31 るもり
30 飛虫 <small>とび</small>	31 飛むし	31 飛虫	30 飛むし
29 たるゝ虫	なし	30 たるら虫	29 たから虫
28 蜈蚣 <small>むかひ</small>	30 百足	29 むかで	28 むかで
27 虱 <small>しじみ</small>	28 しらみ	28 しらみ	27 しらみ
26 蚤 <small>いこずめ</small> (* 2)	29 のみ	27 のみ	26 のみ
25 蛇 <small>へび</small>	27 蛇	26 へび	25 へび
24 蜥蜴虫 <small>とこ</small>	26 とかけ	25 とかけ	24 とかけ
23 蛎 <small>みず</small>	24 みゝず	23 みゝず	22 みゝず

(* 1) 黒川本のみ「蜻蛉 (かげろう)」に「とんぼ」と付す。歌中では他の諸伝本が「蜻蛉 (かげろう)」のところを「とんぼう」と読む。

(* 2) 黒川本は「蚤」に「いなこ」と付す。歌中では他の諸伝本同様「のみ」が読み込まれるので誤写と考えられる。

中野幸一氏は御所蔵本と内閣文庫本とを比較され、御所蔵本の外題に「三十六哥仙」、および本文末に「此三十六首の詠哥はむかしの哥仙をまねび」とあるところから、御所蔵本にはない「けらく」と内閣文庫本にはない「たるら虫」を双方に加えた、全三十六首を「こうろき草子」のもと^註の形として想定されている。その御説はこれらの四つの伝本の比較から明らかのように、信憑性の高いものであるといえるであろう。

内閣文庫本の「けらく」は、史料編纂所本では「げぢく」と表記される。以下にそれぞれの本文を示す。

内閣本「けらく」

よしなくも人のけらを請もせず世にくまる、身をくゆるかな

史料編纂所本「げぢく」

よしなくも人のげぢをば受けずして世にくまるる身をくゆるかな

この二首のうちではどちらが適当なものであるか判然としない。ただし、『虫の歌合』の二番には「げぢく」の歌が収められる。

また中野本「たるら虫」は、黒川文庫本には「たる、虫」、史料編纂所本には「たから虫」と表記される。以下にそれぞれの本文を示す。

中野本「たるら虫」

かなしやと音をこそなかめたるらむしこ、ろのうちを思ひしれかし

黒川本「たる、虫」

かなしやと音をこそなかねたる、虫心のうちこそ思ひしれかし

史料編纂所本「たから虫」

かなしやとねをこそなcameたからむし心のうちをおもひしれかし

三つの虫の名はどれも他に使用例が見つからない。中野本と史料編纂所本の歌意は「悲しいと声を上げて泣（鳴）きたい（けれど泣（鳴）けない）、このたるら（たから） 虫の心のうちを知ってほしい」となる。一方、黒川本の「たる、虫」のそれは、例えば『古文真宝前集抄』（寛永九年刊）に「満園二ハ秋ノ露タレテアルガ、涕泣シタヤウナゾ」などであるように、「垂る」の連体形「垂るる」の掛詞として機能することにより、全体として「悲しいと声には出しては泣（鳴）かないが、涙にくれる心のうちを思い知ってほしい」という歌意が生まれる。このような黒川本と比較するとき、さきの二首「たるらむし」「たからむし」という命名では、歌中に使用されるべき蓋然性が薄いように思われる。何れにしても、諸伝本には転写による誤写、脱文が少なくないようである。

次に冒頭でも触れた「こうろぎ草子」と『虫の歌合』をはじめとする他の異類物との関係について見ていくことにしたい。

まず『虫の歌合』と『こうろぎ草子』を比較してみたい。『虫の歌合』の梗概は、「秋の夜長隠者らしき人物が眠れぬままに枕をそばだてて庭の虫の有様を物語の種に書き付けることにし、虫の中からまずこうろぎが歩み出て詠歌の提案があり、他の虫たちの賛同を得、次にひきがえるの十五番歌合の提案があり、他の虫の推薦により、くちなわ（蛇）を差し置きひきがえるが判者に収まり歌合が催され、最後は判者ひきがえる対くちなわの歌争いがあり、ひきがえるはくちなわを恐れる余り早々にその場から退散する」というものである。双方の類似点は、動物の異類（擬）歌合物の特徴でもある隠者らしき人物の設定があること、「こうろぎ」が詠歌の提案をすること、「ひきがえる」が歌合のきっかけをつくること、「ひきがえる」が判者を務めること、最後に歌争いの設定があること、などである。また、それらには所々同文的な

箇所が認められる。次に、相違点としてまず第一に挙げるべきことは「ころき草子」は判詞を持たないという点である。『虫の歌合』およびその他の動物の異類（擬）歌合物」においては、判者が判詞をよむという設定において、その歌の詠み手である動物の特性や和歌の背景を説き明かし、戯作的な読み物としての完成度を一層高めるとい手法が、常套としてある。「ころき草子」がそういった部分を欠くということは、他の動物異類（擬）歌合物」に比べて説話性には乏しい作品であるという見方もできる。また、『虫の歌合』には『玉虫の草子』を前提にした恋歌における歌合という設定があるが、「ころき草子」にはそういった展開は見られないという点も相違するところである。

『虫の歌合』が動物の異類（擬）歌合物」の先蹤となったことは以下のように認められる。例えば内閣文庫本『鳥歌合・別本』の序文に、

むかしより、玉虫に心をかけしむしとも、奇^歌を作りて心をのへ玉^ぬへ。此こと世にもてはやすほとに、ちかき比、ひかしやまに侍ける翁、是をえらひ、池にすむかはつを判者とさため、左右をわかち、たかひに勝負を批判し、後には、身をひきかへるなど、卑下の詞を入、世に名をたかふす。^{注7}

などとある。当時は一般に『虫の歌合』の作者は木下長嘯子とされていたようであり、「ひかしやまに侍りける翁」は木下長生嘯子を指し、「勝負」とは『虫の歌合』を指す、との指摘がある。^{注8} また、『四生の歌合』における『虫の歌合』以下の三作品（『鳥の歌合』『魚の歌合』『獣の歌合』）の中の『鳥の歌合』が『虫の歌合』を前提にした序文を、『獣の歌合』がその跋文を有している、という指摘もある。^{注9}

このように動物の異類（擬）歌合物」の中には明確に『虫の歌合』を前提に書かれたという本文を有するものが存在している。「ころき草子」にはそれがなく、『虫の歌合』に限りなく近い構成を有するものである、ということを指摘できるとどまる。

最後に「異類物」の動物の名前の付け方に触れておきたい。動物の名前の付け方には大きく分けて二通りあるようで、動物の名前や特性をもじるものと、動物に人間の官職名を付すものがある。『虫の歌合』は前者、「こうろぎ草子」は後者であり、例えば『ふくろふ』[＊]『玉虫の草子』等に類例がみられる。また「こうろぎ草子」では歌合の判者名を、「やふの内中納言藤原慕朝臣のふつ[＊]う[＊]」[＊]公[＊]（黒川文庫本）、「やうこうし中納言在原のひきかへる朝臣信行卿」（内閣文庫本）、「やぶの小路中納言藤原のひきがいるの朝臣のぶつら卿」（中野本）、「薪小路中納言藤原の引帰る朝臣のぶつぐ卿」（史料編纂所本）とする。これが実在の人物に擬されているのかは定かではないが、こうした人間の名がそのまま異類の名前で使われることは稀なことと思われる。

以上、動物の異類の「（擬）歌合物」の中には、動物たちの歌合を聞く隠者の設定が共通して見られるものがあるということ、諸伝本の比較から「こうろぎ草子」の原態は表のような三十六首であったであろうこと、「こうろぎ草子」と『虫の歌合』の類似点と相違点、動物の異類物における異類の名前の付け方の中で「こうろぎ草子」の独自性、などについてを言及した。

これらのことから、動物異類「（擬）歌合物」の作者圈の問題を含めた成立事情を考えるうえで、「こうろぎ草子」は有効な一助となるものであると考えられる。

注

注1 市古貞次『中世小説の研究』（昭和三十年、東京大学出版会）の分類による。動物物として「十二類絵巻」「玉虫の草子」「鳥獣戯歌物語」「四生の歌合」（虫の歌合・鳥の歌合・魚の歌合・獣の歌合）「こほろぎの草子（こうろぎ物語）」「鳥歌合・別本」が、

道具・器物物として「調度歌合」「御茶物語」などがある。

注2 松本隆信「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』昭和五十七年、三省堂)

注3 旧安田文庫本の記載があるが所在不明。

注4 中野幸一「資料紹介『虫の庭訓』と『こうろき物語』」(『学術研究(早稲田大学教育学部)』28、昭和五十四年十二月)

注5 石川透「国立公文書館内閣文庫蔵『鳥歌合』解題・翻刻」(『三田国文』13、平成二年六月)では「内容的には室町時代物語の色彩を濃く有しているのである。実は室町時代物語とされている作品には、このように近世になってからの作品が多く存在しているようであるが、その境界を明確にすることは不可能に近い。」とある。

注6 注4に同じ。

注7 注5に同じ。

注8 注5に同じ。

注9 拙稿「『獣の歌合』」解題(徳田和夫編『お伽草子事典』平成十四年、東京堂出版)

ここに、黒川文庫本の書誌を記す。

「『こうろき物語』(内題)

(近世中期頃写)

番号 223 黒7A

表紙 原装本文共紙。(二十一・五×十六・一糎)

形態 袋綴。仮綴(四つ穴)の跡を残す。

料紙 楮紙。

見返し なし。

外題 表紙中央上部に「こうろき物語」と打付で墨書。

内題 「こうろき物語」

本文 半葉七行十八字内外。漢字仮名交じり、所々に読み仮名を付す。

丁数 全十一丁。

奥書 なし。

印記 前表紙左下部に単郭長方朱印「黒川真道藏書」「黒川真前藏書」。一丁才内題下部に同印「黒川真道藏書」。

備考 ①前表紙左下部に「三家」、後ろ表紙右下部に「此主／三家」と墨書があるが不明。何れも本文共に同筆。

②後装表紙（黄表紙菱形文様型押二十三・五×十六・二糎）を付し、左肩題箋に「こうろき物語」と墨書。本文とは別筆。

③後ろに和歌集（版本の合綴本）を付す。零本（丁付三十七〜四十五）。版心題なし。書名不明。

翻刻に際して、以下の方針をとった。

- 1 本文は底本に忠実であることに努めたが、漢字・異体字は現行の書体に改めた。
- 2 底本の見せ消ちや訂正文字はそのまま残しルビで示した。
- 3 本文上の意味不明箇所にはママを記した。
- 4 底本の丁の末尾を「で示した。

【翻刻】

こうろき物語

三家

こうろき物語

あやしの庵の草枕しはく芝にかりねして

浮世の中をつくくと思ひつゝけて日をおくる

おりしも秋の末つかた庭の面かけ何とやら哀催

し木葉色つき風に乱れてそこはかとなく

あわれもいと夕暮にひとりさひしき月

かけも心をすます折ふしにかたはらなる

萩の下葉の陰よりも虫の数々あつまりて物語

する声聞はいとも哀におかしけにて其内

よりこうろきと云出て申けるはいかにかたく

聞給へ誠に我くか身之上程浅間舗はかなき

事はよも侍らし春過ぬれば夏草の茂りてみ

とりも深き五月雨水無月比は朝なゆふなに

「前表紙

「一才

置露の玉を乱せるかことにて心浮立また

「一ウ

は千草の花の色香に染或はいさきよき水

の流に我身のかけを移し爰かしこを飛遊ひ

空にうかれて世のうき事も思はれすけに

一時の樂しひに千とせを延る心地していと

面白く思ふ内文月も過て葉月のそらに

移りて身はさやかに澄渡り吹くる風も身

にしみていつとなく物かなしく夜も長月の^と

成ぬれは唯さへ心を催すにましてや声もか

れはて、頼草葉に露もやとらすいつしか初

霜に結びかへすねくらあらはに成ぬるに木の

枝に小鳥の声を聞時はきゆる思ひに心をい

たましめ或は人近き垣ねに取付またはゑん

の下に身をかくさんとすれはこさかしき鼠に

さかし出されて浮めをみん事もくちおしく

あなたこなたとさまよへはいたつら成子とも

達にとらへられかなしきかな糸につなかれ

大地を引廻されはじさらしあまつさへ竹の

「二ウ

「二オ

とくいにさし廻(マヤ)されたちまち氣をうしない

すでにむなしくならんとすれは水をのませ

いたはるよふにもてなし漸々心を取直すと

おもへば浅間しや文殺かみされついいはせ、らき

のもくつと成浮めにあわんよりしよせん火の中

へも飛入はやと思ふにも身をいましめて云か

いなくも涙にみをもぬれたれてあら恨めし

き先の世のむくひかそこそかなしけれなき

ても猶餘りありあすの命も白露のとても

消なむ浮身そかしせて心に思ふことの

葉を語り慰給はんとつたなき言の葉を

三十一文字に結び置なき跡のかたみとも

なし給へかしと細々と語ければあまたの虫共

はた寒き衣の袖を顔におしあて、涙を流

し扱々日比思ひけるは(マヤ)こうろき殿はは色も

なく背もか、み生れ付やさしからすまし

て花の元月影にも心をよせ給はす爰の壁

に取付或は何かしかもとに身をかこち内の

「三才

「三ウ

「四才

哀もわきまへす夕暮より夜半の比迄なき

給ふ斗のみと聞侍りしに今宵の物語こそ

何れも催し侍り志の程も有難しとて

やかて涙にくれにける其中よりひきかへる

出て申けるは何様今宵は月もさやかに照

増り面白く思へとも夜も早ふけぬらんはや

とくくと云ければ各々草の葉の上に

座をしめて思ひ々に詠しける心のうち

こそやさしけれ

「四ウ

こうろき

爰の角かしこの壁にすかりつき身は数ならて君はこうろき

機織虫

片糸をよるく野辺にくりかへしはた織かけてなきあかすなり

鈴虫

「五オ

君にかくふり捨られし鈴虫の我身のはてやいかゝなるへき

蜻蛉 とんぼ

哀なり夕へはかなきとんぼうのきゆる命はつゆのひとゝき

玉虫

色深き千草の花のかすくにおもひみたる、露の玉虫

簑虫みのむし

恋わひて涙の雨にぬれにけり我身のむしは聞もかいなし

樵虫せうむし

人しれぬ深山の奥に住なれて朝なゆふなにつま木こり虫

蜂はち

棹さしていつか渡らん初瀬川はちすのふねにのりを求めて

蝶てう

花の色に心をよせてまよふてふあわれと思え草の葉のつゆ

蚕きりくす

けふよりは深き思ひをきりくすなけと哀をとふ人もなし

蛭はな

草の露水の淡とも消やられて絶ぬ思ひにもゆるほたる火

蚊か

夕ぐれの軒端のけふり立まよひ忍ひかねたる身こそかなしき

蠅のみ

玉たれの錦の床の上までもはいあかるこそくわほう成けり

金亀虫こかね

「五ウ

「六オ

「六ウ

山吹の色をあらそふこかね虫草木もなひく光成けり

轡虫くつは

物思ふ心のうちはくつは虫人の情をかけぬ身なれば

松虫まつ

夜もすから恋しき人を待虫の音を鳴あふる野辺の露草

茅蛸ひくらし

何となくけふも日くらしあすはまたいかなるかたに身をや隠さん

蟪蛄かまきり

草の葉をかまきりたて、鳴野へに露の浮めの置所なし

蜘蛛くも

あやしくもかゝるはかなき住居せは飛くる風のたよりたにうき

蛄けち

ちり塚に身はうつもれて過けらしいつゝを宿と定さりけり

蟻あり

山深きくち木の中にありなから峯のあらしを余所に聞らん

芋虫いも

我すみし芋のはたけはあれにけりことしの夏は日てりのみして

蛸みづ

「七才

「七才

浅ましや頭も見へす尾もしれす土の中にて音をのみぞ鳴

蜥蜴虫とつき

「 八才

世をすて、柴の陰に引こもりいかてや人のとくみ成けり

蛇へび

いたつらに身をくちなはと成はて、結ふ糸にしをたよりたになし

蚤いなこ(マ)

ひとりのみ思ふ心のかひもなく飛たすはかりものそかなしき

虱しらみ

思ふ事かきくとく間に長月の夜はほのくとしらみこそすれ

蜈蚣むかて

とにかくに世をはそむかて渡るへしあまたの足も頼れぬ身を

たる、虫

かなしやと音をこそなかねたる、虫心のうちこそ思ひしれかし

飛虫とび

羽もなく行衛もしらて飛虫の思はぬふちに身をなけにけり

守宮いもり

苔ふかき水のそこにててもろ友にとしふる里のいもりおそする

蛙かはづ

「 九才

「 八ウ

古里に立帰るとはしりなから土かきわけてとふ人もなし
やすて

雨ふれはかゝや軒端に集まりて心やすてと遊びぬるかな
蟬セマ

はかなしや身は空蟬のから衣猶恨めしき秋かせそふく

かくと申ていわく此三十六首の詠哥昔の哥仙

をまなひしゆうきのはんしやはやふの内中納言

藤原纂朝臣のふつ*「く」或いは「ら」かう 公也座上につら成いかに

方く宵よりこうろき殿の物語に夜も更ぬれは秋の

夜長と申せとも早横雲もはれんとす此所に

長座しむやくのことに東雲のからすの声もおそろ

しくとくく住家に帰り給へと云守宮此由聞て

蛙か哥のしやう哥をやそねみけんやかてかくよみ

ける

立もせず下にも置すさわかしき

かへるくといふそおかしき

蛙大きにはら立て

いまはしや墨の衣に身をそめて

「九ウ

「十オ

なとか色には深き守宮と

何れもかんしつゝまたこうろき出て互ひに

せんなきあらそひ成とてしつめつゝ各くいとまこひ

してやふの内へそ帰りけるはいとおかしき物かたり

なり

此主

三家

「十ウ

「十一オ

「十一ウ

「後表紙

